Osaka University Knowledge Archive

Title	アラビア語と日本語における名詞修飾節の対照 : 修飾節と被修飾名詞の関連性の対比という観点から
Author(s)	ノラーン マグディー, モスタファ
Citation	大阪大学言語文化学. 2022, 31, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87492
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

アラビア語と日本語における名詞修飾節の対照

―修飾節と被修飾名詞の関連性の対比という観点から―*

ノラーン　マグディー　モスタファ**

キーワード：制限的用法、非制限的用法、接尾代名詞

In Egyptian universities such as Cairo University and Ain Shams University, Japanese departments use textbooks that offer an English explanation, glossary, and examples. However, the students' first language is Arabic. Also, the English expressions are not necessarily equivalent to Arabic ones. Thus, students could face some confusion especially during translation lectures in which they are required to directly translate Arabic to Japanese and vice versa. To enhance the current situation, it is necessary to study the relationship between different expressions in Arabic and Japanese, while also considering the influence of the textbooks' English explanation.

In this paper, I chose noun modification out of different expressions that could cause such confusion. Noun modification includes different grammatical features the students learn such as a variety of particles and verb conjunctions. It is also the step in which students learn to form longer sentences and how to add a clause into sentences. In other words, it is a necessary expression to form more elaborate sentences and an advanced discourse.

Many possible comparison points can be utilized to analyze the similarities and differences of noun modification in Arabic and Japanese. For example, structure, types of meaning implemented in the clause, independence of the clause, usage of pronouns in the clause, etc could all be used in the comparison. In this paper, I chose to compare a more basic aspect which is the relationship between the modified noun and the modification clause.

The result of this comparison shows that five facts need to be clearly explained to the students so that they get a better grasp of this grammatical feature. For example, it is essential to understand types of Japanese noun modification in order to decide which

---

* A Comparative Study of Noun Modification in Arabic and Japanese Based on the Relationship between Modifying Clause and Modified Noun (MOSTAFA Noran Magdy)

** 大阪大学言語文化研究科博士後期課程兼アインシャムス大学外国語学部日本語学科助手

expression it can be converted to when writing Arabic. During this process, students should also gather necessary information such as gender and number through Japanese context so that they could use the appropriate Arabic wording. When converting Arabic to Japanese, students are required to expand the grammatical structure to extract the modified noun if relative pronouns such as "*man*" or "*maa*" are used.

1. 序論

エジプトの大学の日本語学科における基礎日本語の指導方法は、間接文法訳読法とでも言うべきものと口頭練習を組み合わせた指導方法になっている。日本語教育の一般的な教育方法と同じく、基礎段階で基本的な日本語の文型と文法が網羅的に学習内容とされるわけだが、その際に、教師は学習対象となる日本語表現を英語に訳した文を提示し、英語を媒介とした文法解説を加えるのが一般的である。そして、学習者は日本語の表現を一旦英語を通して説明され、理解した内容を母語であるアラビア語を用いて再解釈し、その結果として得た要点やまとめを忘れないように母語でノートあるいは教科書にメモしていく。

その後、学習者は口頭であるいは書記の形で日本語の形式を中心とした練習を重ね、次に、その実際的な使用の練習として教師が提示した状況の中で対象の日本語表現について教師からのフィードバックも得ながら運用練習をする。そして、中級段階に進むと基礎段階ですでに習得された表現の拡大に伴い、辞書で語彙の意味を確認する場合のみ英語が使用されるが、それ以外では日本語とアラビア語の相互変換が行われる[1]。しかし、このような指導方法及び学習のプロセスではそれぞれの言語間における表現の差異が十分に考慮されていない。

本稿ではそのように学習されている各種の表現のうち、日本語の重要な構造の１つであり、高次のディスコースを構成する際に重要な役割を果たす名詞修飾節に焦点を当てる。管見の限り名詞修飾節の日本語とアラビア語を対照し英語で補足を加えた対照研究はない。

名詞修飾節は基礎の後半に登場する表現であり、その中にはそれまで学習されてきた語彙、助詞、動詞の活用などが含まれている。そして、前述の学習方法で基礎段階を終えた学習者は名詞修飾節をすでに習得しているとみなされる。しかし、名詞修飾節の多様化と使用頻度の増加を伴う中級段階に進んだ学習者は、一度学び習得したはずの名詞修飾節の表現に違和感を覚えるようになる。例えば、それぞれの語彙の意味がわかるの

[1] 以上の指導方法の現状は Noran（2019）で詳しく述べている。

に、学んだとおりに日本語の名詞修飾節を関係節に置き換えることができない文章に遭遇した場合や、アラビア語の関係節ではない表現であるのにもかかわらず名詞修飾節に変換される表現に遭遇して適正に文章を書けなかった場合などである。こうした日本語習得上の課題を克服するためには、日本語、アラビア語、英語における名詞修飾節の特徴や各言語間における表現の関連性を明らかにする必要があるだろう。日本語・英語・アラビア語という間接文法訳読法の課題を解決する第一歩として、本稿では様々な比較対照の軸になり得る観点の中から、名詞修飾節と被修飾名詞との関連性に注目してこの3言語間の対比を行う。その理由は基本的な要因でありながら、修飾節の解釈と深く関わっているからである。他にも名詞修飾節の構造的な特定及び意味的な特定、各言語における名詞修飾節の起源と独立性、名詞修飾節における代名詞の使用などといった多様な比較観点があるが、本稿では上記の観点に集中する。こうした研究の結果、指導上の留意点が明らかになる。それについては結論で整理することとする。

2. 修飾節と被修飾名詞との関連の対比

2.1 語順と名詞修飾節の位置の関連

日本語の名詞修飾節は被修飾名詞の前に置かれるため、「前置型」の節として分類されている。それに対して、英語とアラビア語において被修飾名詞の後に置かれることから「後置型」に分類される。下記の指摘の通り、日本語とアラビア語の語順が逆になる場合が多々あり、英語と同様の語順が使用される場合もあるため、アラビア語では被修飾名詞と修飾節の順が日本語と逆で英語に近いのである。

> 日本語はS・O・V語順であるということからも、日本語をアラビア語に訳すときは「後ろから翻訳する」という暗黙の規則が出来てしまっている。しかし、そのような例に当てはまらない例は少なくない。アラビア語では原則としては「V・S・O」の語順であるが、地域や表現技法によっては、主語が動詞の前に来ることもあり得るのである。（アルモーメン、ワリード、2020、p.57）

したがって、アラビア語は語順が日本語よりも英語に近く、「関係節」という名称がどちらでも使用されていることから、アラビア語の「関係節」と英語の「関係節」はかなり類似性の高い表現であると考えられる。そのため、日本語学習現場では英語とアラビア語の相違点を特に気にすることなく、英語を用いた文法的な解説の使用は学習をサポートする有効な手段とみなされている。しかし、実際には相違点もあり、比較する観点によって、日本語のほうがアラビア語に近い場合もある。特に名詞修飾節の用法にお

いて、日本語のほうがアラビア語に近いことが顕著に現れる。

2.2 英語とアラビア語の関係代名詞

英語の関係節で使用される関係代名詞と関係副詞は例（1）と例（2）のように使用される。

（1）The restaurant where I first met my wife.
（2）The restaurant which my friend recommended.

アラビア語でも、関係代名詞と関係副詞があるが、その性質は英語とは異なる。まず、関係代名詞だが、被修飾名詞の性、数、格の影響を受けるタイプと受けないタイプの2種類がある。前者は被修飾名詞が定名詞[2]である場合のみ使用できる。つまり、修飾される対象が限定されており、その対象の性、数、格と適合する変化形が用いられる。また、数に関して英語のように単数と複数形のみではなく、英語にはない双数形という物や人の数が2である場合に使う形態もある。そのように性、数、格の影響を受ける関係代名詞をまとめたものが表1である。英語の関係代名詞をアラビア語に訳すと、「what」、「why」以外はすべて表1の関係代名詞を用いて訳すことが可能である。例えば、上の例（1）と例（2）におけるレストランは単数形で男性名詞なので、英語の関係代名詞はどちらも「'alladhii」に置き換えられる。

表1　アラビア語の関係節における関係代名詞（性と数の影響を受ける）

	単数形	双数形		複数形
		主格	属格・対格	
男性名詞	'allaḏhii الذي	'alladhaan اللذان	'alladhayn اللذين	'alladhiin الذين
女性名詞	'allatii اللتي	'allataan اللتان	'allatayn اللتين	'allaatii / 'alla'ii / 'allawaatii[3] اللاتي / اللائي / اللواتي

端的にいうと、表1の関係代名詞は英語の「that」のようなものである。英語の関係節における関係代名詞をアラビア語に置きかえる際に、関係代名詞が果たす意味的な役割よりもコンテキストで示される被修飾名詞の文法的な特性がむしろ注目される。つま

[2] 定名詞とは定冠詞がついている名詞や固有名詞などで、詳しくは2.2で検証する。
[3]「'alla'ii」は被修飾名詞が人間ではなく、ものである場合に使用される。「'allaatii」と「allawaatii」には違いが見られなかった。どちらを使用するかは任意である。

り、英語の関係代名詞をアラビア語における「that」相当物に置き換えることが決定しており、「that」相当物のどの変化形を選ぶかをコンテキストを基に性、数、格を判断し、適切な変化形を選ぶという感覚である。日本語の場合、英語よりも数を読み取るのは難しく、時には主語なども省略されており、コンテキストから必要な情報を読み取る難易度が上がると言える。しかし、アラビア語母語話者を対象に名詞修飾節が「'alla」を用いた関係節に置き換えられるという明示的な解説及び適切な表１の変化形を選ぶための指導が必要だと判断される。

一方、もう一種類の、被修飾名詞の性、数、格の影響を受けない関係代名詞の場合は、前に被修飾名詞は現れない。つまり、その関係代名詞には被修飾名詞の大まかな意味が含まれているのである。そして、その含まれているが明示されていない被修飾名詞は非限定名詞と捉えられる。例えば、アラビア語で「勉強した人が合格した」と表現する際に、表２の１段目の「man」の例のように述べ、「人」という名詞が関係代名詞の前に書かれることはなく、「man」という関係代名詞には「人」という意味が含まれている。そして、「合格した」と「勉強した」の動詞の活用形が単数形の男性形であるため、被修飾名詞であり主語でもある「人」はデフォルトとしては一人の男性と捉えられる。しかし、その「人」は限定されておらず、「人」「学生」「受験者」などといった様々な人物を思い浮かべられる文となる。次節の表３の訳で（　）内に書かれている語も同様に単語そのものは被修飾名詞として表示されていないが、関係代名詞の意味に含まれている。

ちなみに、３段目にある「'ay」は選択肢がある中で「どちらか」を選ぶ際に使用される。選択肢は人でも物でも区別なく用いられるので、コンテキストがなければ意味が読み取りにくい表現である。

表２における関係節及び次節の表３における「〇〇でも」の関係副詞を含むアラビア語の関係節を日本語に置き換える際にはいわば構造の拡張処理が必要になる。例えば、表２における「man」はアラビア語母語話者から見れば、関係代名詞であり、日本語への置き換えの際に削除される部分である。しかし、実際には「man」を「the person who」に相当する「何かをした人」に拡張する必要がある。そして、その単体で登場せず、より長い文章の一部であれば、「人」をさらに「兄」「受験生」「A さん」などとより具体的に述べる必要がある。

日本語の名詞修飾節は「機嫌がよくなる音楽」のように条件部分の「聴けば」が省略される名詞修飾節があり、寺村（1992）ではそのタイプは短絡と呼ばれている。アラビア語では逆に修飾節の一部を消すのではなく、被修飾名詞を省略することが可能である。そのため、日本語の名詞修飾節に置き換える際には被修飾名詞を回復する必要がある。

表２　アラビア語の関係節における関係代名詞（性と数の影響を受けないもの）

関係代名詞	条件	例	構造	日本語相当文	英語相当文
man من who	被修飾名詞が人間	من ذاكر نجح man dhaakr najaḥa	関係代名詞＋動詞「勉強した」＋動詞「合格した」	勉強した（人）が合格した	The（one/person/student）who studied passed.
maa ما what	被修飾名詞が物	وجدت ما كنت أبحث عنه wajatu maa kuntu 'abḥathu ‘anhu	動詞「見つけた」＋関係代名詞＋不規則動詞「kaan」＋動詞「探していた」＋前置詞＋代名詞接尾	探していた（もの）を見つけた	I found what I was looking for.
'ay أي which	被修飾名詞が人間でも物でもいい	اختر أيهما تريد أن نشتري 'ikhtar 'ayahuma toriidu an nashtari	動詞「選らぶ」＋関係代名詞＋動詞「欲しい」＋接続詞＋動詞「買う」	どちらが買いたい（ものな）のかを選んで	Choose which（one）you want to buy.

以上のようにアラビア語と英語の関係節において、関係代名詞や関係副詞は修飾節が文に含まれていることをマークする語になり得る。また、アラビア語では関係代名詞は主に表１のように被修飾名詞との文法的な関連を示す。英語では被修飾名詞との意味的な関係が示される。一方、日本語の文章で名詞修飾節の存在を明示的に示す語や修飾節と被修飾名詞の文法的または意味的な関連を明確に示す役割を果たす語はない。そして、日本語の名詞修飾節における被修飾名詞と修飾節の文法関係がしばしば未決定になる。その一例として加藤（1999）は（3）の「彼が買った店」を挙げ、以下のように２種類の解釈ができると述べている。

（3）彼が買った店　→店<u>を</u>彼が買った / 店<u>で</u>彼が買った

加藤（1999）は文法論的な要因よりも語用論的な要因のほうが名詞修飾節の解釈に深く関わっていると主張している。文法論的な要因は排除されたわけではなく、ただ格関係よりもむしろ修飾節内の動詞と被修飾名詞の意味的な関連のほうが優先されて解釈が行われるとしている。例（3）は下の（3a）や（3b）のように置き換えることが可能である。

(a3) المتجر الذي اشتراه

発音：'almatjaru 'alladhii ishtaraahu

構造：定冠詞 + 名詞 + 関係代名詞 + 修飾：動詞 + 接尾代名詞

構造の直訳：The shop+ that+ he bought it

英語相当文：The shop which he bought

(3b) المتجر الذي ذهب إليه للتسوق

発音：'almatjaru 'alladhii dhahaba ilayhi liltasawuqi

構造：定冠詞 + 名詞 + 関係代名詞 + 修飾：動詞 + 前置詞 + 接尾代名詞 + 前置詞 + 名詞

構造の直訳：The shop+ that+ he went+ to it+ for shopping

英語相当文：The shop where he went shopping

（3a）のようにアラビア語の被修飾名詞が「店」なのにまた「店」を指す接尾代名詞で修飾節が終わっている。さらに、接尾代名詞は性と数が「店」のそれと一致している。アラビア語では１つの言葉に代名詞、性、数、格などといったあらゆる要素が含まれているため、日本語よりも解釈がより特定される。

それに対して、英語の場合はそのような要素が１つの言葉に含まれてはいないが、関係代名詞や関係副詞が被修飾名詞と修飾節の間にどのような関係があるのかを示し、例（3a）と（3b）のように使い分けることで、解釈を特定している。日本語の場合、「彼が買った店」を「彼が店を買った」と「彼が店で（何かを）買った」のどちらに解釈するかは加藤（1999）が述べるように「判断には世界知識が関わっている」のである。その世界知識とはテクストの場合は他の文から得たコンテキストであり、日常会話などの場合は会話の前後や話し手に関するそれまで得た知識や常識などである。

以上を踏まえると、日本語の名詞修飾節は最も解釈の幅が広く、アラビア語では単語に含まれている接尾代名詞や人称などが解釈の幅を狭める役割をしており、英語の場合は関係代名詞や関係副詞が意味的な関連性を示している。

2.3 アラビア語の関係副詞

これまで挙げてきた関係代名詞の他にもアラビア語には関係副詞として捉えられている要素もある。それらも前項表２の「man」などと同じく、性、数、格の影響を受けない。その一部を表３に示す。

なお、表３の語を関係副詞として捉えるのはアラビア語母語話者ではなく、アラビア語を外国語として学んでいる学習者の場合である。なぜなら、アラビア語母語話者から

すれば、「ḥaithu」は場所の副詞の一種であり、「ḥinna」は時の副詞の一種である。アラビア語を国語として学ぶ場合は、これらの副詞を関係節や関係代名詞とは別の事項として学ぶ。つまり、アラビア語母語話者にとって、関係節として最も印象が強いのは表2や表3の関係詞が用いられている文である。表4の言葉が使用されている節は関係節として見られることは少なく、アラビア語母語話者ではない人から改めて解説されないと関係節として意識することはあまりない。この点は、Holes（2004）やRyding（2005）などのアラビア語母語話者向けの文法書とOmar他（1994）やAldihidah（1997）などのアラビア語を外国語として学習する人向けの文法書を比較すれば、明らかである。

さらに、「どこでも」を意味する「ḥaithumaa」はその下に記載されている「ḥaithu」に表2の「maa」を付け加えた表現であり、その組み合わせは「接続副詞」と呼ばれていることが「関係節」として意識しにくい一因である。また、「ḥaithu」の代わりに「後」を意味する「b'ada」や「そこで / そのとき（at）」を意味する「'inda」などに「maa」を付け加えて他の「関係副詞」の役割を果たす語を作ることも可能である。そして、そういった表現や表3の「どこでも」の場合、表2の関係代名詞「maa」が加わっているので、被修飾名詞を用いる必要はない。したがって、そのような表現も日本語に置き換える際にいわば構造を拡張する処理が必要である。

表3　アラビア語における関係副詞の例

関係副詞	例	構造	日本語相当文	英語相当文
حيثما ḥaithumaa どこでも Wherever	ذاكر حيثما تريد dhakiruḥaithumaa turidu	動詞「勉強」+関係副詞+動詞「欲しい」	どこでもしたい（場所）勉強して	Study wherever you want
حيث ḥaithu 場所を表す Where	المركز حيث درست اللغة اليابانية 'almarkazu ḥaithu darasutu 'allughati 'alyaabaaniya	名詞「センター」+関係副詞+動詞「学ぶ」+名詞「言語」+名詞「日本」	日本語を学んだセンター	The center where I learned Japanese
متى Mataa いつでも Whenever	يمكنك الذهاب متى تشأ Yomkinaka 'adhihaba mataa tasha'	動詞「できる」+能動分詞「行く」+関係副詞+動詞「したい」	いつでも行きたいときに行ける	You can go whenever you want.

حين ḥinna 時を表す When	الفترة حين انتشر وباء كورونا 'alfatura ḥinna intashara waba'u korona	名詞「時期」+ 関係副詞 + 動詞「流行る」+ 名詞「病気」+ 名詞「コロナ」	コロナウイルスが流行した時期	The period when corona virus spread

3. 関連の表現

3.1 緩やかな修飾関係のイダーファ

アラビア語には関係節とは別にイダーファという表現がある。「イダーファ」とは「付け加える」という意味であり、不定名詞に関する情報を付け加えることが目的である。例えば、「音」という不定名詞に「雨」という定名詞を加え、「音 + 雨」で「雨の音」を表すことが可能である。そして、アラビア語には動名詞、能動分詞、受動分詞といった動詞に準じる動作を表す名詞が存在するので、例（4）のような表現も可能である。他にも定冠詞がついている名詞について情報を加える「偽イダーファ」もある。

(4) صوت تساقط المطر

発音：ṣawtu tasaaquṭ almaṭar

構造：不定名詞 + 動名詞 + 定冠詞 + 名詞

構造の直訳：Sound+falling+the rain

英語相当文：Sound of rainfall

日本語相当文：雨が降る音

上記のようにイダーファとは名詞が並列された表現であり、そこに分詞、副詞、前置詞、動詞といった要素が含まれていない。それにも関わらず、イダーファを用いた修飾が可能なのは、アラビア語における単語の特徴が原因である。まず、アラビア語母語話者向けの文法書における「品詞」とは「名詞」、「動詞」、「文字」[4] の 3 種類である。そして、単語と捉えることができる名詞と動詞に関してアルモーメン他（2020）では、下記が述べられている

> アラビア語は、形態面から屈折言語に分類される。つまり、単語は実質的な意味を表す部分と文法的な意味を表す部分とから成り、また、その二つの部分は融合しており、分離することができない。文法的な部分は、語形変化し、性・数・格・人称・時制を示す。

[4]「文字」はアラビア語の直訳であり、そこには代名詞、前置詞、副詞などといった語が含まれている。

つまり、アラビア語において、動詞や名詞には不変的な部分と変化する部分がある。アラビア語を直訳すると、変化しない部分は「(発生)源」と呼ばれ、アルモーメン他(2020)では「語根」と呼ばれている。それらの変化しない部分は日本語の「語幹」と呼ばれる部分と似ている。例えば、日本語では「書く」の「書」は物事を記すという意味を備えており、「書く」「書かない」「書こう」などにおける「書」のあとの部分が文法的な意味を担っている。アラビア語の場合「kataba」は「書いた」を意味し、「katabat」「katabuu」「katabaa」に語形変化し得るが、必ず「k−t−b」という意味を担っている部分が含まれる。さらに、アルモーメン他(2020)の表1には「k−t−b」を語幹とする言葉の例がまとめられており、その一部を借りると「Kātib＜作家＞」「Kitāb＜本＞」「maktabah＜図書館＞」などの記載されている。すなわち、「k−t−b」から「書く」ことに関わる様々な名詞が派生しており、動詞として使用する際も人称、性、数、時制といった要素も加えられる。

上記のような特徴があるため、アラビア語的な文法視点では「元気な」「活発な」「大きい」「美しい」のような形容詞は名詞とみなされる。同様に、「書く」の動名詞、「書いた」を表す能動分詞、「書かれた」を表す受動分詞などといった動作を表す名詞もある。

以上を踏まえると、イダーファには形容を表す名詞や動作を表す名詞などの多様な名詞が使用され得る。そして、イダーファが例(4)における「雨＋降る」のように2語以上から構成される場合、形容詞や動詞を代用する名詞が含まれる確率が高くなり、意味的にクローズ(節)に近づいていく。

日本語の名詞修飾節には例(3)の「彼が買った店」のように被修飾名詞と修飾節の間に格関係があり、「店**で**彼が買った」のように文に開けるタイプとそうではないタイプがある。前述の例(4)では「音」と「雨が降る」を結ぶ格助詞はなく、寺村(1992)はこのタイプを「外の関係」と呼んでいる。Noran(2019)が述べたように外の関係の修飾節はイダーファに置き換えることは可能だが、関係節に置き換えることができない。そのように被修飾名詞と修飾節の文法的な関連性が緩やかな場合、イダーファが適していると言える。しかし、アラビア語母語話者は名詞修飾節の種類やイダーファが使用可能であるといった解説を受けない。そのため、関係節化できない名詞修飾節に遭遇した場合、意味を把握しにくいと感じることが予想される。

3.2. 制限的用法と非制限的用法

井上(1976)によると、名詞修飾節には制限的用法と非制限的用法がある。先行研究によって、「制限的」と「非制限的」の代わりに「限定的」と「非限定的」と呼ばれることもあるが、本稿では「制限」と「非制限」として統一する。下記の(5)では「何

人かいる友人」の中から「京都に住んでいる」という選別が行われ、被修飾名詞である「友人」が修飾節によって制限されたため、制限的用法となる。それに対し、(6) ではすでに「花子」という特定の人物を指しており、修飾節は被修飾名詞である「花子」に関する情報を付加しただけであり、何らかの制限をしたわけではないので、非制限的用法となる。

(5) 京都に住んでいる友人は鴨川が好きだ。
(6) 京都に住んでいる花子は鴨川が好きだ。

日本語の場合はそのように修飾節の意味に注目し、被修飾名詞に対して制限をかけたのかあるいは情報を付加したのかといった意味関係によって、被修飾名詞と修飾節の関連性を見出すことになる。英語の場合、修飾節の用法は (7) と (8) のように書記言語では、コンマの使用によって見分けることが可能である。

(7) My friend who lives in Kyoto likes Kamogawa River.
(8) Hanako, who lives in Kyoto, likes Kamogawa River.

コンマのような明示的なマーカーの使用による制限・非制限の表示は日本語でもアラビア語でも不可能である。アラビア語の修飾節に構造の面で変化をもたらすのは被修飾名詞の「定・不定」である。被修飾名詞が「定名詞」として認識されるには定冠詞の有無、固有名詞か否か、属格限定や接尾代名詞による限定の有無という 3 要因に左右される。被修飾名詞に定冠詞があるまたは「ナイル川」や「花子」のような固有名詞である場合は定名詞とみなされ、関係代名詞が使用される。属格限定や接尾代名詞による限定の有無は例 (9) の「友人」の発音語尾の四角で示しているように「ii」という代名詞によって、「私の」という意味が付加され、「誰の友人」なのかを特定したことで、「友人」は修飾節が加えられる前に一度ある程度限定されたので、「定名詞」として扱われる。

(9) صديقتي التي تسكن في كيوتو تحب نهر كاموجاوا

発音：ṣadiiqatii 'allatii tasukuna fi kiiwutu tuḥiba nahura Kamogawa

構造：名詞 + 接尾代名詞 + 関係代名詞 + 修飾節：<u>動詞 + 前置詞 + 名詞</u> + 述語：動詞 + 名詞 + 名詞

構造の直訳：my friend+ that+<u>she lives+ in+ Kyoto</u>+ she loves+ River+ Kamogawa

英語相当文：My friend who lives in Kyoto loves Kamogawa River

(10) هاناكو التي تسكن في كيوتو تحب نهر كاموجاوا

発音：Hanaku 'allatii tasukuna fi kiiwutu tuḥiba nahura Kamogawa

構造：名詞 + 関係代名詞 + 修飾節：動詞 + 前置詞 + 名詞 + 述語：動詞 + 名詞 + 名詞

構造の直訳：Hanako+ that+ she lives+ in+ Kyoto+ she loves+ River+ Kamogawa

英語相当文：Hanako, who lives in Kyoto, loves Kamogawa River

Amer（2010）においても「Although semantically relative clauses in Arabic may be restrictive（defining）or non-restrictive（non-defining）, this has no structural reflection」[5] と述べているように、日本語と同様に構造の違いが修飾節の用法を示すことはない。したがって、日本語とアラビア語の場合、修飾節と被修飾名詞の関連性は意味に注目して初めて気づくことができるが、英語の場合は構造から用法を判断することが可能である。この議論は書記言語の場合の話であるが、口頭での表現においても、英語の場合は制限的か非制限的かはポーズとイントネーションで表示されるが、日本語とアラビア語ではそうした表示もされない。

また、制限用法における被修飾名詞が「前」や「後」などの相対名詞だった場合、関係節の使用ができず、例（11）のように前置詞の使用が可能である。そして、同様に被修飾名詞が抽象的なものでその内容をさらに詳しく述べる場合、例（12）接続詞などといった表現が使用される。アラビア語母語話者には例（11）や（12）のように関係節が使用できないタイプの名詞修飾節を見分け、適切な表現を選択することが求められ、その点についての指導が必要となろう。

(11) بعد انتهاء الامتحان

発音：b'daa intiha'i 'alimitiḥani

構造：前置詞 + 動名詞 + 名詞

構造の直訳：after+ending+test

英語相当文：After the test was over

日本語相当文：試験が終わった後

(12) احتمال أن تمطر اليوم

発音：'ḥtimaal 'an tumṭer 'alyawma

構造：名詞 + 接続詞 + 動詞 + 名詞

[5] オンラインで公開された論文で具体的なページ番号の記載がなかった。URL は文献リスト参照。

構造の直訳：possiblity+that+rain+today
英語相当文：Possiblity of it raining today
日本語相当文：今日雨が降る可能性

4. 結論

日本語、英語、アラビア語における名詞修飾節の対照を行った結果、関係代名詞の使用による関連性を軸にすると、表１のアラビア語における関係代名詞は英語のように意味的な関連性を示すものではなく、単純に被修飾名詞の性、数、格と一致するだけの代名詞が選ばれる。例外は表２と表３で示しているが、特に表３の表現はアラビア語母語話者にとって関係節だとは意識されない。したがって、アラビア語の主要な関係節において関係代名詞は修飾節と被修飾名詞のいわばつなぎ役を担っているにすぎず、意味的な関連においては英語のような直接的な結びつきはない。また、修飾節と被修飾名詞の意味的な関連という点では、日本語の名詞修飾節には多様な解釈が可能な場合があり、アラビア語では文法的な要因を用いて意味を間接的に指すが、英語では関係代名詞や関係副詞が直接的に関連を示している。

そして、用法に現れる被修飾名詞と修飾節の関連という観点では、英語の場合は構造的に用法を示すことが可能だが、アラビア語と日本語では構造的な制限的用法と非制限的用法の特定はなく、用法を知るには意味的に解釈するほかない。また、制限用法で修飾される名詞の性質によっては関係節の使用が不可能である。以上、ひじょうに基本的なことながらこれまで明示的に示されることがなかった事実がこうした整理で明らかになった。以上をまとめると表４の関係性が明らかになる。表４のように、アラビア語は英語と日本語のいわば中間的な位置にあるという基本的な事実が明らかになった。

表４　英語、アラビア語、日本語の対照結果

	英語	アラビア語	日本語
修飾節のマーカーの有無	○	○	×
格関係、文法関係の明示度	○	○	×
被修飾名詞と修飾節の意味的な関連の表示	○	△	×
制限・非制限用法の表示	△	×	×

以上のような対照を行った結果、学習者に下記の５点について適切な指導が必要なことが明らかになった。

a. 文法的な関係が明確な日本語の名詞修飾節はアラビアの「'alla」で始まる関係代名詞を用いて関係節化することが可能である。

b.「'alla」で始まる関係代名詞の適切な変化形を選択できるためには日本語の被修飾名詞の文法的な特徴をコンテキストから読み取る必要。

c. アラビア語の関係節で使用される関係節代名詞によって、日本語に置き換える際に文構造の拡張という処理が必要になる。

d. 文法的な関係が緩やかな日本語の名詞修飾節はアラビア語のイダーファという表現に置き換えることが可能である。

e. 関係節、イダーファ、その他の前置詞や接続詞を用いた表現の中から名詞修飾節の意味と合致する適切なものを選択できるように指導する必要がある。

こうした諸点は現在の教科書の解説には反映されておらず、また教科書にある練習は名詞修飾節の直前に置かれる動詞や形容詞の活用に焦点化されている。また、中級段階以降で名詞修飾節を取り上げて解説されることなども、筆者の学生としての経験と現役教師とのコミュニケーションからは行われているとは見られなかった。実際の指導と習得の実情については別途調査を行う予定である。

参考文献

アルモーメン・アブドーラ、ワリード・イブラヒム（2020）『日本語・アラビア語翻訳研究の諸相－翻訳教育と異文化コミュニケーション』デザインエッグ発行.

井上和子（1976）『変形文法と日本語（上）』大修館書.

加藤重広（1999）「日本語関係節の成立要件(2)– 文法論的要因と語用論的要因」『藤山大学文学部紀要』31、pp.71~156.

柴田道広『アラビア語検索エンジンアラジン ver1』.
（http://www.linca.info/alladin/index.html）

寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集 I—日本語文法篇』くろしお出版.

Noran Magdy Mostafa（2019）『アラビア語第一言語話者から見た日本語の名詞修飾節－エジプト人中級日本語学習者を中心に』大阪大学修士学位論文.

Hanan Rafik Mohamed、吉田昌平（2014）『大学のアラビア語発音教室』東京外国語大学.

Ahmad Muhtar Omar, Mustafa Alnahaas Zahran, Mohamed Hamasa Abdel-Latif (1994). Alnahwu Alasasii (النحو الأساسي) [Basic Grammar]. Dhaata Alsalaasel.

Ali Eljarim & Mustafa Amin (1987). *Alnahwu Alwadeh Fi Qawaaed Allughati Alarabiya Lemadaaris Almarhala Aluula*

(النحو الواضح في قواعد اللغة العربية لمدارس المرحلة الأولى) [The Clear Grammar in Arabic Grammatical Rules for First Grade of Elementary Schools]. Dar Almaaref.

Antuwan Aldihidah (1997). *Muugham Qawaaed Allughati Alarabiya fi Jadawel Wa Lawhaat* (معجم قواعد اللغة العربية فى جداول ولوحات) [Dictionary for Arabic Grammar rules in tables and charts] . Maktabet Lebnan.

Clive Holes (2004). *Modern Arabic Structure,Funcations, and Variety.* Georgetown Universiry Press.

Karin C.Ryding (2005). *A Reference of Grammar of Modern Standard Arabic.* Cambridge University Press.

Walid M.Amer (2010).*On the Syntactic and Semantic Structure of Relative Clauses in English and Arabic: A Contrastive Study.*Journal of Fikr wa Ibda' Egypt. (http://hdl.handle.net/20.500.12358/25674)

Yuusef Alhamadi, Mohamed M. Elshinnawy, Mohamed Shafiq Ataa (1994). Alqawaaed Alasasiyatu fi Alnahwi wa Alsarifi Litulab Almarhalati Alsanawiyati (القواعد الأساسية في النحووالصرف لطلاب المرحلة الثانوية) [Baisc ruled of Grammar and Morphology for High School Students]. Almataabe Alamiriyah.